

Royal Navy Heavy cruiser Suffolk

Japan Maritime Self-Defense Force Icebreaker Shirase

Imperial Japanese Navy Cruiser Takao

World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About

Imperial Japanese Navy Second Class Battleship Chin-en

艦三艦3

~だれも見したことないジミなマイナー艦船模型の世界~
米波保之 大日本絵画

Imperial Japanese Navy Seaplane tender Notoro

Royal Navy Frigate HMS Antelope



Imperial Japanese Navy Submarine I-6

Imperial Japanese Navy Supply ship Mamiya



Japanese Maritime Self-Defense Force Tank landing ship Miura



Imperial Chinese Navy oiler Hayasui



Imperial Japanese Navy Dispatch vessel Mogami



Royal Navy Light Cruiser HMS Edinburgh

Imperial Japanese Navy Heavy cruiser Mogami C37



Royal Netherlands Navy Light Cruiser Tromp



Imperial Japanese Navy Gunnery training ship Hiei 1933



Imperial Japanese Navy Seaplane tender Akitsushima



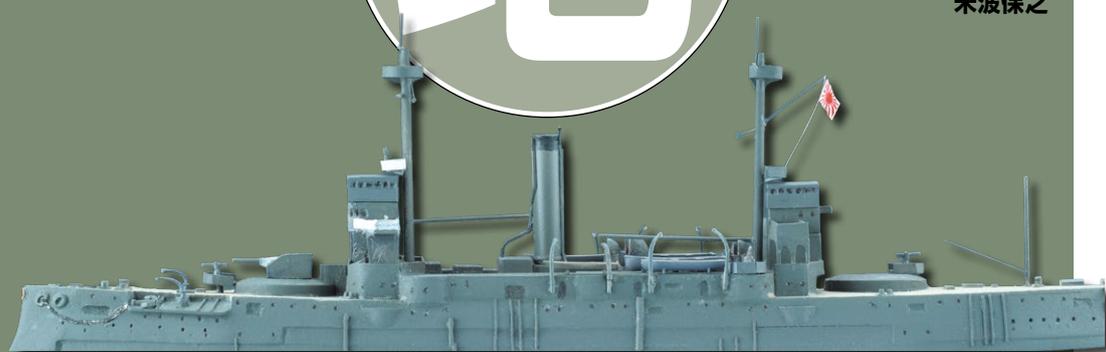
The World of
Unfamiliar
Ship Models
that no one
Ever Knew
About

地艦

3

～だれも
見たことない
ジミなマイナー
艦船模型
の世界～

米波保之



異色のコレクション～

“ジミ艦” ワールドへようこそ！

2005年夏、『ネイビーヤード』誌の創刊から始まった連載もちょうど60回。20年が経過したことになります。私自身も還暦を迎えた節目の年に、3冊目の「ジミ艦！」を刊行させていただけることを心より御礼申し上げます。

この20年間、皆様と共に歩んできた、と私が勝手に思い込んでいる“ジミ艦”ワールドなるものが、本当に存在するのか……？

流行りのチャットAIに「ジミ艦とは何ですか？」と尋ねてみました。元々が私の造語であるゆえ、頓珍漢な答えが返ってくるのだろうな、と予想していましたが……

回答:

「ジミ艦」という言葉は、正式な軍事用語ではありません。これは主に軍艦や艦艇を語るファンや研究者のあいだで使われる俗称・愛称的な表現で、意味としては次のようになります。

意味:

「派手な戦果や話題性はないが、地味に重要な任務を果たした艦」を指して「ジミ艦」と呼びます。

用法・ニュアンス:

例えば、大戦中に華々しい海戦で活躍した戦艦・空母ではなく、輸送任務・哨戒・護衛・補給・工作などを黙々とこなした艦に対して、敬意や愛着を込めて「ジミ艦」と言うことが多いです。この呼び方にはしばしば、「派手な戦果はなかったけれど、戦争を支えた縁の下の力持ち」という評価と親しみがこもっています。日本海軍で「ジミ艦」と評されることがある艦の例としては：補給艦・給糧艦（例：給糧艦「間宮」）、工作艦「明石」、海防艦（択捉型・占守型など）、輸送艦・掃海艇・駆潜艇などが挙げられます。

なるほど、ありがとうございます。それでは、ジミ艦の魅力とは何ですか？

回答:

「ジミ艦の魅力」とは、単に「目立たない艦」という意味を超えて、戦史の裏側で支えた存在への共感と敬意に通じるものです。以下にその魅力を整理してみましょう。

1. 「派手さの裏で戦争を支えた」実直さ

ジミ艦の最大の魅力は、戦場の現実を支える縁の下の力持ちであった点です。例えば――

給糧艦「間宮」は、前線の兵士に甘味や温かい食事を届け、士気を維持した。工作艦「明石」は、損傷艦を戦線に復帰させる「戦場の修理工場」だった。海防艦や駆潜艇は、補給船団を守り、見えない敵＝潜水艦と戦った。これらの艦がいなければ、どんな戦艦や空母も継戦できません。「派手ではないが、最も「必要とされた」艦」――この実直さ・献身性が多くの人を惹きつけます。

2. 「記録に残りにくい」からこそ、掘り下げがいがある

「大和」や「赤城」のような有名艦は資料も多く語り尽くされていますが、ジミ艦は史料も少なく、記録も散逸していることが多い。そのため、調べるほどに「こんな任務をしていたのか」「実はこの艦がいたから作戦が成り立ったのか」といった発見や再評価の喜びが味わえるのです。研究者や軍艦ファンにとっては、この「知る者だけが知る深み」も大きな魅力です。

3. 「人間味」と「生活感」がある

ジミ艦では、激戦よりも人間の営みや日常の努力が前面に出ます。たとえば――「間宮」のお菓子や風呂の話、「明石」の整備兵たちの工夫、護衛艦隊の雑多な連携と日常会話など、そこには戦闘よりも人間ドラマがある。だからこそ「ジミ艦」は、戦争を“人の視点”から感じさせてくれる存在でもあります。

4. 「地味」＝堅実・信頼・職人気質

ジミ艦には、どこか日本的な美德が投影されています。派手さを求めず、黙々と職務を果たす。注目されずとも誰かのために働く。結果よりも責務を優先する。こうした姿は、まるで“職人”や“裏方の匠”のようです。そこに惹かれる人は多く、地味さの中に格好よさを感じます。

総括:ジミ艦の魅力とは、

歴史的には、戦争の裏方として不可欠な存在。

感情的には、無名の努力・誠実さへの共感

研究的には、知られざる史実を掘り下げる楽しみ

美学的には、派手さよりも「静かな格好よさ」

ということになります……。

どうでしょう？あまり的確な回答に感動すら覚えてしまいました。“ジミ艦”ワールドというものが確実に存在するのだと確信した瞬間でした。そしてそれは、本書をお手に取っていただいた皆様の思いやお力が結集されて成り立っているのだということを……。それでは一緒に“ジミ艦”ワールドでの三歩目を踏み出しましょう。

第1部 ジミ艦！スタンダード

帝国海軍給糧艦 間宮	6
帝国海軍標の艦 摂津	10
帝国海軍工作艦 朝日	14
帝国海軍給油艦 速吸	18
帝国海軍水上機母艦 能登呂	21
コラム	24

第2部 ジミ艦！メジャー

帝国海軍水上機母艦 日進	26
帝国海軍航空母艦 海鷹	29
帝国海軍潜水艦 伊1、伊6	32
帝国海軍水上機母艦 秋津洲	35
／帝国海軍防護巡洋艦 秋津洲	35

第3部 ジミ艦！フォリナー

フランス海軍水上機母艦	40
コマンダン・テスト	40
イギリス海軍重巡洋艦 サフォーク	43
オーストラリア海軍重巡洋艦 キャンベラ	46
オランダ海軍軽巡洋艦 トロンプ	49
イギリス海軍軽巡洋艦 エディンバラ	52

第4部 ジミ艦！オールドタイマー

帝国海軍通報艦 最上	56
清国海軍甲鉄艦 鎮遠	59
／帝国海軍二等戦艦 鎮遠	59
帝国海軍運用術練習艦 春日	63
／帝国海軍装甲巡洋艦 春日	63
帝国海軍巡洋艦 高雄 (二代目)	67
／帝国海軍砲艦 摩耶 (初代)	67

第5部 ジミ艦！アーリー・デイズ

帝国海軍練習戦艦 比叡	72
／帝国海軍戦艦 霧島 第一次改装時	72
帝国海軍重巡洋艦 最上 原計画C37	76
／艦橋構造試案S6	76
／帝国海軍重巡洋艦 高雄 1932	80
コラム2	80

第6部 ジミ艦！モダンネイビー

イギリス海軍フリゲート アンテロープ	82
海上自衛隊輸送艦 みうら	85
／海上自衛隊輸送艦 あつみ	85
海上自衛隊砕氷艦 しらせ 初代 (AGB-5001)	89
／2代 (AGB-5003)	89
海上自衛隊 2次防ヘリコプター空母	93

The World of Unfamiliar Ship Models that no one Ever Knew About

ジミ艦3

～だれも見たことないジミなマイナー艦船模型の世界～



本書は雑誌『ネイビーヤード』の2019年秋刊行の41号から2025年秋刊行の60号までの連載コーナー『ジミ艦！～マイナー艦船の世界』において発表した作例を中心に、同誌の巻頭特集などに向けて製作したものと、本書のための作りおろし作例を加えて一冊にまとめたものである。一部の作例は、その後のリサーチによりアップデートしている。

前巻の『ジミ艦2』を上梓したのがちょうど令和元年。誰もが世のシステムや価値観が大きく揺らぐ経験をしてきた中で、模型の世界でも3Dプリントの技術により作成された超精密なキットや周辺パーツが勃興するなど、“ミクロの視点”が席卷しつつある。しかし、本書の作例ではそれらを部分的には採り入れつつも、“岸壁に立って沖に浮かぶ船をながめている”視点から、昔ながらの(?)手作りにこだわって、物語とともにジミ艦たちにアプローチすることを旨としている。

第1部の冒頭に掲載した「間宮1941年」は本書のための作り起こし作例になる。本文では“ジミ艦の女王”を港で働く小舟の視点でとらえた私小説風の文体で語ってみた。

第5部の『ジミ艦！アーリー・デイズ』は艦船模型界の主要級である帝国海軍の戦艦、重巡洋艦といったビッグネームも“ジミ艦”になりうる……。という新提案(?)である。当初は『ネイビーヤード』の巻頭特集に向けて製作した彼女らを“ジミ艦”として扱うのは、当の私自身にも少々抵抗があったが、そもそも編集部から製作依頼があったのは、その時代の彼女らの姿が模型化されていない、すなわち本書の副題“だれも見えないジミなマイナー艦船模型の世界”の一員なのだということを思い出し、一つの章にまとめてみた。各項に参考文献として挙げているものは昭和期など古い出版や洋書、雑誌のバックナンバーや同人誌等、入手困難なものも多いが、いずれもジミ艦に対する造詣を深めるうえでお勧めできるものなので、出会いがあれば手に入れておいて損はない。連載開始当初には考えられなかったことだが、ほとんどキット化されていなかったジミ艦たちも、各メーカーの努力で手に取れるものが増えてきた。本書がそれらの魅力的な模型たちにトライするきっかけや手助けになれば、筆者としてそれほど嬉しいことはない。



米波保之

よねひら のぶゆき

静岡市在住。家業の茶道具古美術品店経営の傍ら、1/700艦船模型製作および執筆活動を展開。

1997年に地元で地元ガレージキットメーカーでレジンキャストキットの原型師としてデビュー。以降、ヒットロード社ハイモールドシリーズの原型や青島文化教材社の小冊子付き限定キット「ガイド&ディテール」シリーズの小冊子の執筆などを手掛け、大日本絵画月刊「モデルグラフィックス」でライターとしてデビュー。2005年、同社「ネイビーヤード」創刊号より『ジミ艦!』の連載を開始。2016年より月刊「モデルアート」にペンネームの鯨水庵八十八名義で『艦船諸国漫遊記』の連載を開始、現在に至る。執筆活動のほか、地元模型メーカーの艦船プラモデルの監修なども手掛ける。著書に『ジミ艦～だれも見えないジミなマイナー艦船模型の世界～』。艦船研究者畑中省吾氏との共著書に『日本海軍軽巡洋艦1/700 やっぱり軽巡洋艦が作りた! マスターモデリングガイド』(いずれも大日本絵画刊)

本書のコンセプト

初出掲載誌紹介

イギリス海軍フリゲート アンテロープ

ネイビーヤード41号 / 2019年7月号

清国海軍甲鉄艦 鎮遠 / 帝国海軍二等戦艦 鎮遠

ネイビーヤード42号 / 2019年11月号

オーストラリア海軍重巡洋艦 キャンペラ

ネイビーヤード43号 / 2020年3月号

帝国海軍航空母艦 海鷹

ネイビーヤード44号 / 2020年7月号

帝国海軍給油艦 速吸

ネイビーヤード45号 / 2020年11月号

帝国海軍通報艦 最上

ネイビーヤード46号 / 2021年3月号

帝国海軍水上機母艦 日進

ネイビーヤード47号 / 2021年7月号

帝国海軍運用術練習艦 春日 / 帝国海軍装甲巡洋艦 春日

ネイビーヤード48号 / 2021年11月号

海上自衛隊砕氷艦 しらせ 初代 (AGB-5001)

2代 (AGB-5003)

ネイビーヤード49号 / 2022年3月号

帝国海軍標的艦 摂津

ネイビーヤード50号 / 2022年7月号

帝国海軍潜水艦 伊1、伊6

ネイビーヤード51号 / 2022年11月号

オランダ海軍軽巡洋艦 トロンプ

ネイビーヤード52号 / 2023年3月号

帝国海軍水上機母艦 秋津洲 / 帝国海軍防護巡洋艦 秋津洲

ネイビーヤード53号 / 2023年7月号

イギリス海軍軽巡洋艦 エディンバラ

ネイビーヤード54号 / 2023年11月号

海上自衛隊輸送艦 みうら、あつみ

ネイビーヤード55号 / 2024年3月号

帝国海軍巡洋艦 高雄 (二代目) / 帝国海軍砲艦 摩耶 (初代)

ネイビーヤード56号 / 2024年7月号

イギリス海軍重巡洋艦 サフォーク

ネイビーヤード57号 / 2024年11月号

帝国海軍工作艦 朝日

ネイビーヤード58号 / 2025年3月号

帝国海軍水上機母艦 能登呂

ネイビーヤード59号 / 2025年7月号

フランス海軍水上機母艦 コマンダン・テスト

ネイビーヤード60号 / 2025年11月号

連載以外の作例

帝国海軍練習戦艦 比叡 / 帝国海軍戦艦 霧島 第一次改装時

ネイビーヤード48号 / 2021年11月号

帝国海軍重巡洋艦 最上 原計画C37 / 艦橋構造試案S6 /

帝国海軍重巡洋艦 高雄 1932

ネイビーヤード46号 / 2021年3月号

ネイビーヤード56号 / 2024年7月号

海上自衛隊 2次防ヘリコプター空母

ネイビーヤード59号 / 2025年7月号

ジミ艦! スタンダード

彼女たちは休みなく働いた。
燃料の補給だったり、戦で傷ついた兵の手当てだったり……。
それぞれが任務に特化した個性的な姿をもつ特務艦たち。
ジミ艦! の王道といえる彼女らが、喜ばしいことに近年では模型化されることも増えてきた。
連載開始当初から待望してきたあのフネも、本書のための作り起こしでここに登場!

帝国海軍給糧艦 間宮
6



帝国海軍標的艦 摂津
10



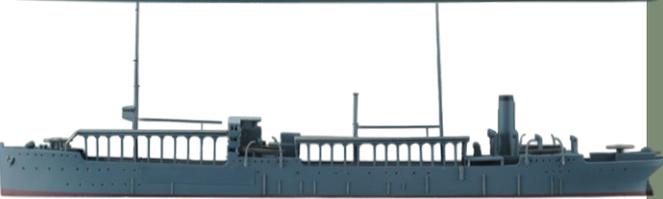
帝国海軍工作艦 朝日
14

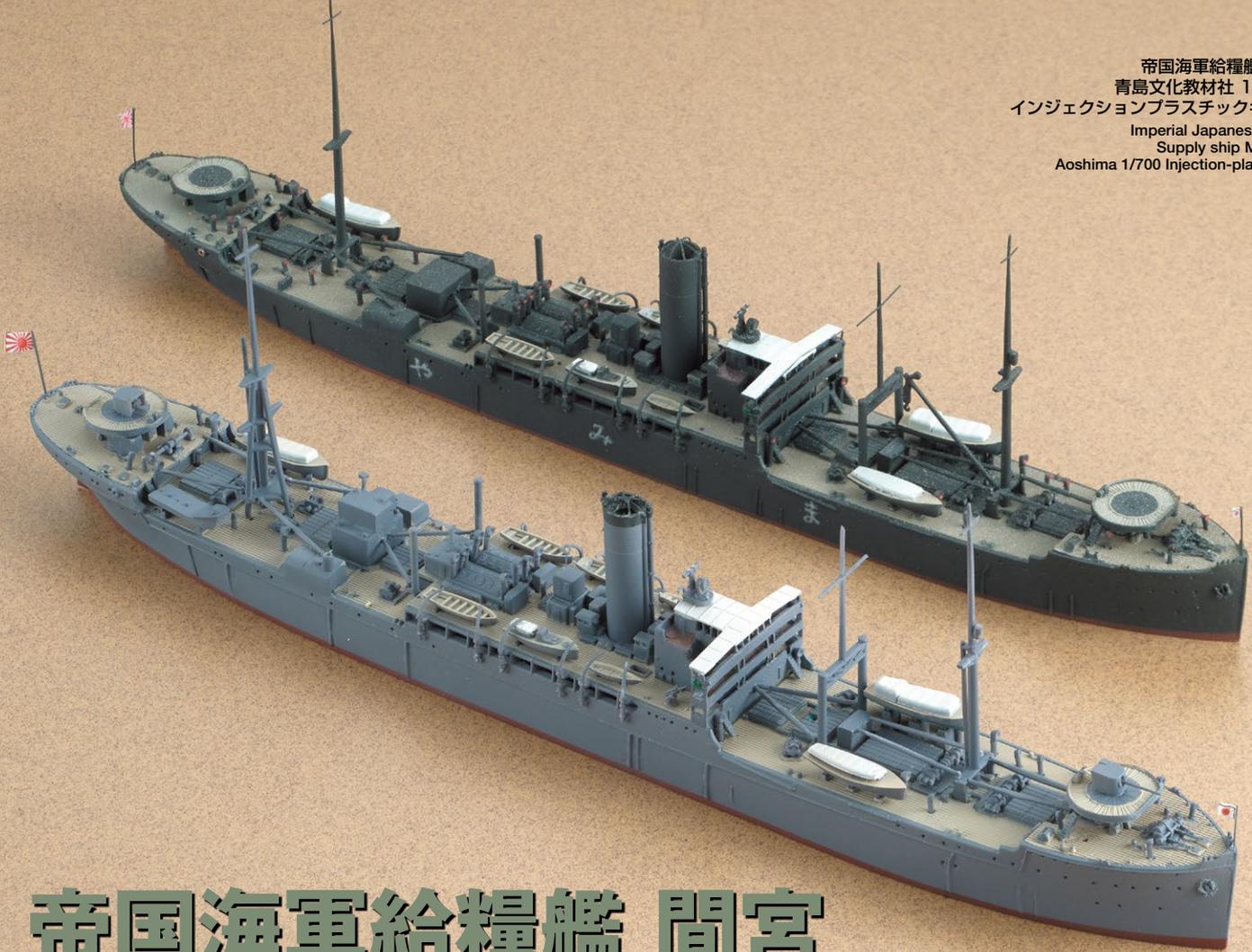


帝国海軍給油艦 速吸
18



帝国海軍水上機母艦 能登呂
21





帝国海軍給糧艦 間宮

Imperial Japanese Navy Supply ship Mamiya

「間宮、入港します。」見張り員の声に和やかな空気が流れる。
艦隊に愛された彼女を支える、港の“さざ波衆”が語る、ジミ艦女王の物語

■港のさざ波衆

あの戦の頃、おいらは南方の軍港で働いてた。「水船第三号」なんて適当な名前と呼ばれてたけど、まあ名前なんかどうだっていいや。埃をかぶったような昔の話だけだね、ちょっと聞いていきなよ……。

ここには特別な船がいる。帝国海軍特務艦「間宮」。お堅い名前前の軍船だけだね、おいらは密かに「マミさん」って呼ばせてもらってるのさ。マミさんの回りでは小さい船たちが忙しく働いてる。埠頭へと押してく曳船やら、マミさんへ荷を運ぶ運搬船やら、マミさんの荷を下ろすはしけ艇やら……。おいらはマミさんに清水を運んでる。「マミさん、今日の分の水を持ってきたよ。」ゴゴゴゴ……。ちょっと錆びの浮いたおいらの水タンクからホースでマミさんの腹の中に清水が吸い込まれてく。「おおきにござんさん。今日は40畳も羊羹を拵えなあかんから、せわしないこっちゃ。」おいらが運んだ水がああ甘い羊羹になるなんて、なんだか不思議だな。

おいらたちは雑役船。海軍ではそんな風と呼ばれてる。それでもマミさんは「あんたら「さざ波衆」のおかげさんで大助かりや。」なんて親しみを込めてねぎらってくれるのさ。乙な呼び方だろう？ さざ波が集まってやがて大きな波になる。その波に乗って大海原に漕ぎ出すのが船ってもんだ。おっと、話が横道にそれたな。

■マミさんの生い立ち

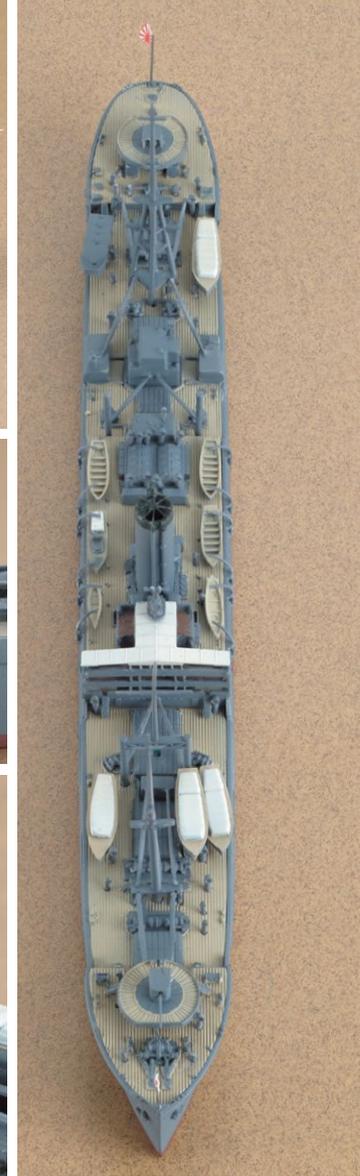
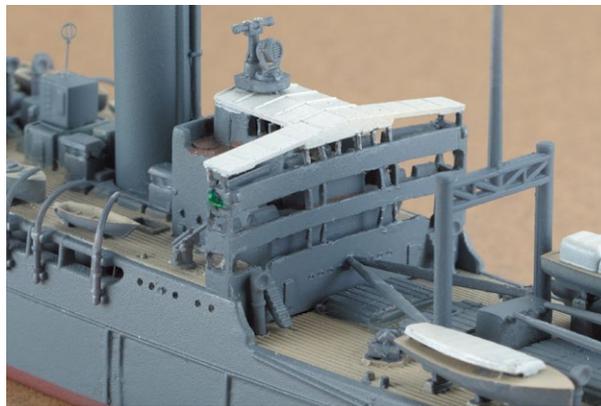
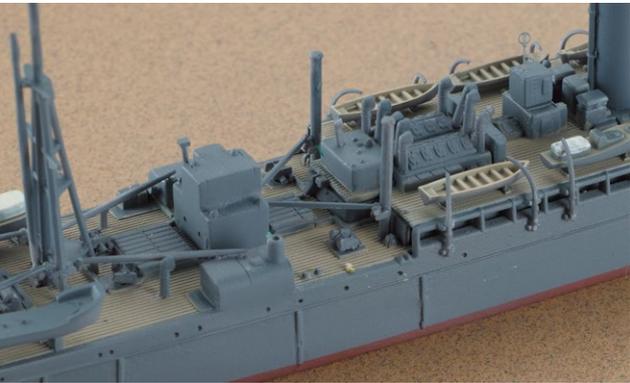
マミさんは大正13年、神戸の川崎造船所で生まれた。皇太子裕仁親王と良子女王が結婚されたお目出度い年だ。そう。後の昭和天皇ご夫妻だな。国内でメートル法が採用されたり、マミさんのおくに故郷の方じゃ甲子園球場が出来たのもこの年だったな。

食糧を運ぶ船なんて海軍にはなかったから、建造が決まるまではすったもんだがあったみたいだぜ。日露戦争で食糧の確保に苦心していた主計関係者が食糧を専門に運ぶ船の建造を熱望していたけど、兵科では八八艦隊の構想で熱くなっていたから、そんな船を造る余裕があるものかって。ところがその後、ワシントンで軍縮条約が締結されて大きな軍艦は思うように造れなくなった。それで、形勢は逆転した。海軍では後方支援の特務艦は全然足りてなかったから、条約で縛られないそれらの船を建造することになった。条約でおじちゃんになった戦艦「愛宕」と「加賀」の缶をまみさんがもらい受けるはずだったんだけど、解体のために横須賀に曳航された「加賀」の缶が、関東で震災があって届かなくなった。それで大正12年6月に予定されていたマミさんの進水は遅れに遅れたけど、同じ震災で被災して空母への改装が取りやめになった「天城」の缶をもらえることになって、1年遅れで晴れて帝国海軍の仲間に加わった。

■洋上の甘味処へ

マミさんは大した船だったぜ。腹の中にはばかデカイ冷蔵庫・冷凍庫があって収められる肉や魚、野菜なんかは1万8000人の3週間分っていうんだけど、一体どのくらいの目方なんだろう？ パンやこんにゃく、豆腐、油揚げ、麩なんかもそれぞれ専用の厨房で作れて、食肉用の家畜を飼育する設備まで持っていた。そして腕の立つ専門職人が軍属として乗艦して腕を振るってた。けれども、マミさんみたいな船は帝国海軍では初めてだったからね。どういう運用方法になるかはまだ模索中だった中、昭和2年に五代目の艦長になった入江淵平中佐というお方は、粋な男だった。なにしろ、マミさんを役立たずだって言うんだ。「甘くてとろけるような味で船乗りたちの心を満たせなきゃ、給糧艦としちゃあ半人前」だってことで、糧食品生産設備の完備とともに嗜好品生産設備も整備すべきだって海軍のお偉方に上申したのさ。この要望に海軍大臣も太鼓判を押した。お堅い海軍省もずいぶん乗り気で、全く使われていなかった家畜用の部屋を改造。そこを製菓室やうどん製造室として5年くらいのうちに入江艦長が要望した以上の最新の設備を備え付けてくれた。入江さんが要望したのは酷暑の南方水兵の喉をうるおすラムネやアイスクリームを製造する設備と動力装置付きの製麺機で、艦内で羊羹を作りたいだなんて言ってないからね。おいら、腹あ抱えて笑ったね。お偉方も、

1941



いざ艦隊勤務になったら甘いもんやうどんが食べたかったんじゃないかな？ それで、船の上では、大福なんかの生菓子より日持ちのいい羊羹がよしいってことで作られるようになったってわけさ。当時の羊羹は市中では15銭くらいだったけど、たったの4銭8厘で買える名物は、そこいらにあるやつじゃなく、そりゃもうとびっきり上等だったからね。新鮮な食糧やお菓子だけでなく、マミさんは洗濯物をパリッと仕上げるのもお手のもので、「間宮温泉」なる広々とした風呂場も備えてた。マミさんでは他の船では貴重な清水がたっぷり使えるからね。水兵たちの嬉しそうな顔を見ると、水船のおいらも鼻が高かったね。

マミさんが港に近づいて来れば、離れたところからでもおいらたちにはすぐわかったね。潮風に乗って、軍艦とは違う石鹸の匂いと、飯やら小豆やら砂糖が炊ける甘い匂いがかすかに漂ってくるからね。名物の間宮羊羹は1本たったの4銭8厘で買ったから、どこの港でも引っ張りだこになった。マミさんが入港すれば、いつもは強面のどっかの軍艦の艦長も口元をそっと緩ませてたのを、おいらは知ってるぜ。

平時は210人くらいいるマミさんの乗組員は、帝国海軍の他の船と違って半分くらいが主計課員だったんだそう。主計課は帝国海軍で庶務・会計・被服・糧食なんかを受け持つ部署だけど、食材の調達や艦内での製造・保管・分配方法なんかの高い専門性と知識を学んだ海軍経理学校出の士官にも実力を発揮できる場として、マミさんは憧れの船だった。主計科にはほかに戦闘詳報の記録や

ら研究やいろいろなお役があった。そのためかマミさんは艦隊内の不適切な通信を見張ったり、通信技量を見定める無線検知艦とやらの任務も命じられてたらしい。時折聴こえてくる通信機の音に、「なんの音だい？」って訊いたら、「あは。今日は製麵機の調子が悪いや。」なんてすっとぼけてたけど。

平和な時代は長くは続かず、紀元二千六百年観艦式に参列した後は、マミさんにも戦支度が始まった。空っぽだった砲座に重たい大砲を積み込んで、胴体には磁気機雷除けの電路をぐるぐる巻きつけて、いつもと違ってなんだか緊張してるように見えるマミさんに、少しでも笑ってほしくて「へえーっ、めかし込んだね」なんて冷やかしたら、「もっつたが、昭和17年半ばからは一進一退となって、頑丈なマミさんにも疲れの表情が見え始めてきた。そして負け戦が続くようになると、戦の直前に出来上がった妹分の「ヨシコちゃん（伊良湖）」とともに、アメリカ軍につけ狙われる存在になってた。戦に長けてるやつらには、彼女らが帝国海軍にとってかけがえのない存在だってことがばれてたからね。サカナの名前の潜水艦たちが手ぐすね引いて狙ってた。マミさんは相変わらずの美人

■マミさんの戦争

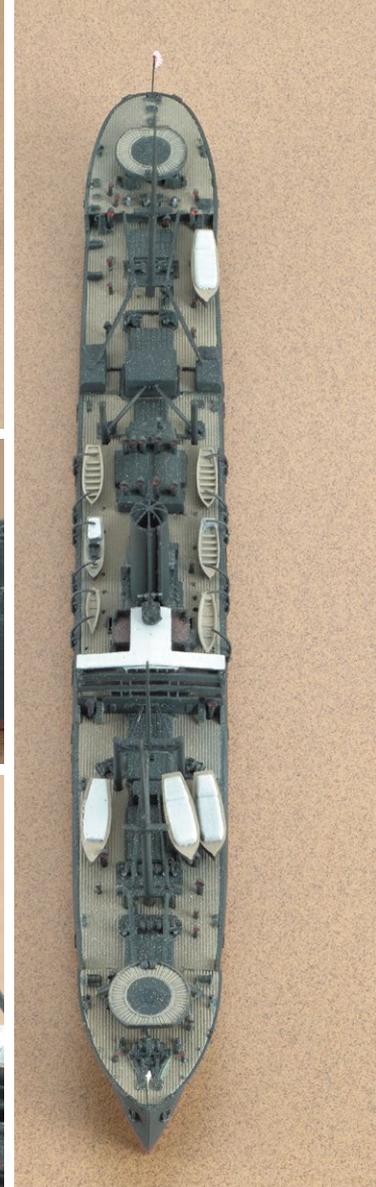
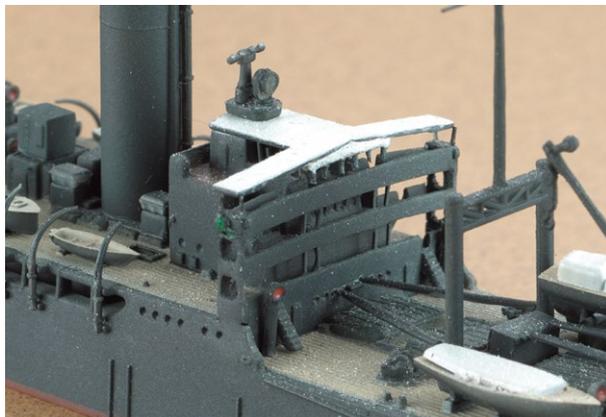
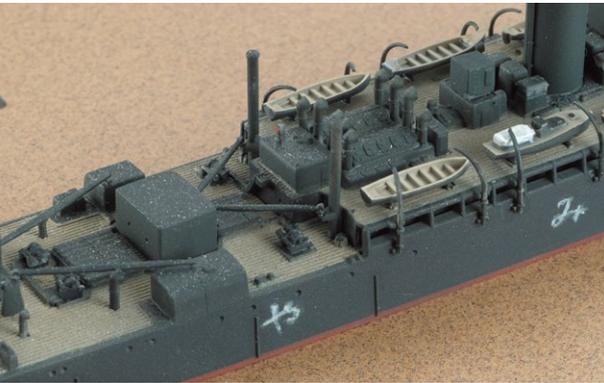
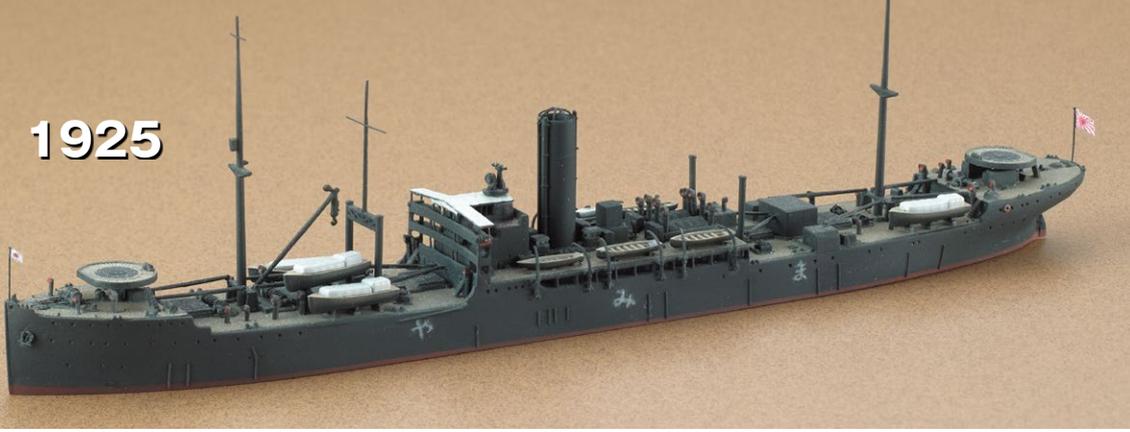
戦が始まると、マミさんは南方に進出した。艦隊に食糧やお菓子を届けるために内地からトラック泊地を行ったり来たり、忙しいだけじゃなく危険な航海だった。はじめの勝ち戦が続いてた頃はよかったが、昭和17年半ばからは一進一退となって、頑丈なマミさんにも疲れの表情が見え始めてきた。そして負け戦が続くようになると、戦の直前に出来上がった妹分の「ヨシコちゃん（伊良湖）」とともに、アメリカ軍につけ狙われる存在になってた。戦に長けてるやつらには、彼女らが帝国海軍にとってかけがえのない存在だってことがばれてたからね。サカナの名前の潜水艦たちが手ぐすね引いて狙ってた。マミさんは相変わらずの美人

だったけど、大正生まれのお婆ちゃんだからね。石炭炊きで足だって速くない。おまけに高い煙突はよく目立って、潜水艦の格好の目標になったからね。

昭和18年10月12日、横須賀からトラックに向かう途中父島の西南で最初の被雷。航行不能になったけど味方の船に厳重に護られて何とか呉にたどり着いた。昭和19年2月には南方の一大拠点だったトラック泊地もアメリカ軍機の空襲で破壊放棄されちゃった。それからのマミさんは輸送船団に加わっての任務が主になってますます危ない航海が続いた。同じ年の4月27日には門司から台湾に向かう途中、男女群島の近くで二度目の被害に遭ったけど、ここでも生き残ったのはさすがの強運だったね。ところが12月20日、今度はサイゴンからマニラへ向かう途中の南シナ海で「シーライオン」とかいうアメリカの潜水艦に狙いを定められた。魚雷4本を食らったけどマミさんは沈まなかった。奴さんは味方の反撃を回避して、5時間後に動けないマミさんにとどめを刺しに来た。万事休す。21日未明まで頑張ってたマミさんを狙って発射された魚雷を3本発のうち2本が命中。マミさんは海の底へと消えていった。マミさんの乗組員はたったの6人しか助からなかったそうさ……。

マミさんが最初に被雷した時、報を受けた軽巡「大井」の艦長が、「間宮を救うぞ！」とばかり救助に向かおうとしたけれど、5日はかかる距離だったので果たせなかったそう。その気持ち、痛いほどわかるぜ。おいらだって、太平洋を駆け回る軍艦に生まれてたら、どんなに遠くてもマミさんを

1925



助けに行きたかったさ。

こうして戦が終わった後も、マミさんは方々で愛されているんだね。

■今のおいら……？

虹の向こうの戦のない国の港で、こうして動き続けてるのさ。なにしろおいらの運ぶ清水は、船乗りたちにとっては大事なお宝だからね。長い航海に出るためにゃ、まだまだおいらたち“さざ波衆”ががんばらにゃあ。

さて、お退屈さま。懲りずにまたおいらの話をお聞きたけりゃ、いつでもこっちへ来なよ。マミさんからちょっと頂いた、とびっきりの甘い羊羹をほおばりながら、昔の話をしようじゃないか。それじゃ、航海の安全を祈るぜ。

■「間宮」を作る

「間宮」のキットはピットロードと青島文化教材社から発売されている。ピットロード製はフルハルモデルとなっているので、作例では青島文化教材社のキットを使用して、就役後間もなくの1925年と1941年開戦時の状態として製作した。両者は基本的なスタイルはほとんど変わらないが、後檣、武装、構造物の一部が異なっている。

本キットは2014年『1/700 艦隊これくしょんブラモデル、No.24』として登場したものが初出で、2015年にウォーターラインシリーズに加わった。大和ミュージアムに所蔵される1936年の状態を示す公式図面に基いた同社渾身の綿密な設計で、各所に設置されるウインチや小さなキセル型通風筒なども部品化されている。それだけに組み立ての

難易度は少々高くなるが、お助めの傑作キットである。

■船体

船体はよくできているが、好みで舷側にモールドされている外板の継ぎ目は削り取った。また、写真との比較で乾舷側高さが不足しているように見えるので、底面の縁に沿って湾曲させたプラ角材を貼り直し増高している。艦尾に一体モールドされている舵は下部をプラ板で継ぎ足している。

■船橋・構造物

船橋パーツは細かく分割され、よく再現されているが、部品の繋ぎ目が目立つのでプラ材やパテで隙間を均している。ガラス窓を表現したパーツが付属するが、実艦では窓はなく筒抜けなのでパーツを使用せず、プラ材を細切りにして仕切りを入れた。船橋前面のパーツ (A7) は、窓状の仕切りの部分が太いので切除して、0.3mm角のプラ材で作り替えた。仕切りの位置も写真を参考に見直している。煙突はトップの格子のパーツ (B18) は、伸ばしランナーを放射状に組んで置き替えた。

前檣はキットパーツ (D1) の上部とヤードの部分を出来るだけ細く削って使用。中段にモールドされている見張り所は切除して1.2mm径のプラ丸棒で作り替えた。1925年時の後檣はヘビーデリックが設けられておらず、単檣だったので、部品 (D1) の支柱の部分を切除し、主檣のみとして使用している。また、同年時では、後檣の前にある洗濯室 (B19～B21) の上に設置される乾燥機室がまだ設けられていなかったため、該当部分を切除して、開いた穴をプラ板で塞いでいる。1941年時の作例では乾

燥機室の左舷側にキノコ型通風筒を追加している。各デリックブームはキットパーツを出来るだけ細く削ってから所定の位置に取り付けている。

■武装・その他

「間宮」は艦首尾の砲座に砲を搭載した写真が存在せず、公式図にも描かれていないため、正確な装備状況は不明だ。作例では艦首尾の砲座に14cm単装砲をファインモールド・ナノドレッド (WA44) から流用して取り付けた。船橋後方両舷の8cm高角砲は図面でシールドなしとして描かれているので、ピットロード 新 WWII日本海軍艦船装備セット[3]のものを使用して取り付けた。この砲は係止時には最大仰角をかけているのが特徴なので、組み立てる時に箱絵を参考に砲身の仰角を調整するとよい。煙突後方の方位測定室 (D19) 上のアンテナ (B7) は軍艦堂の3Dプリントパーツ (GK70107) に交換した。船橋後方に両舷3隻ずつ搭載されている端艇のうち、真ん中の2隻は、キットの組み立てずの指定と異なり、右舷は9m内火艇、左舷は9m内火ランチとなる。9m内火艇は (W39) が使用できるが、9mランチは部品化されていないので、9mカッター (W29) を改造して製作した。

■参考文献

写真 日本海軍全艦艇史 [下巻] (KKベストセラーズ) 丸スペシャルNo.34特務艦のすべて (潮書房) 歴史群像太平洋戦史シリーズVol.37 帝国陸海軍補助艦艇 (学研) 日本海軍ロジスティクスの戦い 給糧艦「間宮」から見た補給戦のすべて (光人社) 資料協力 大平陸雄氏

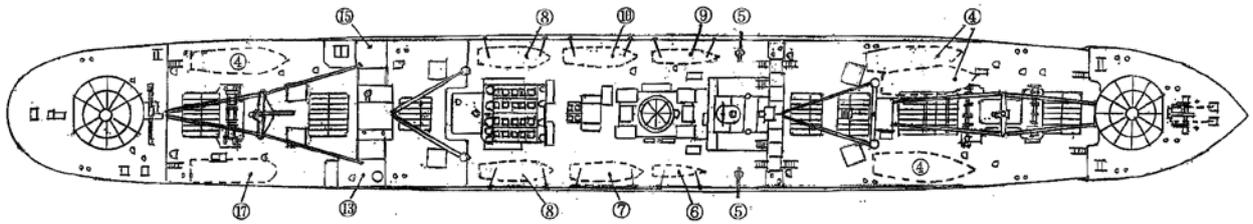
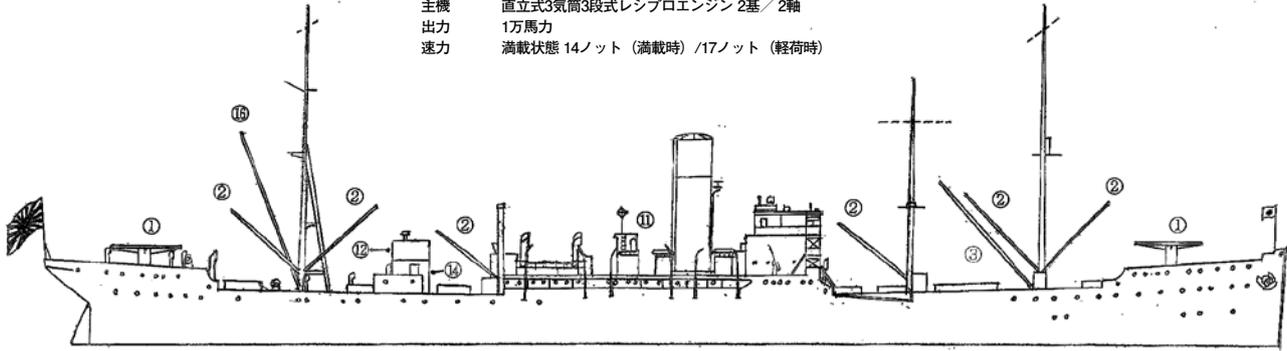
間宮 1936年

Mamiya 1936

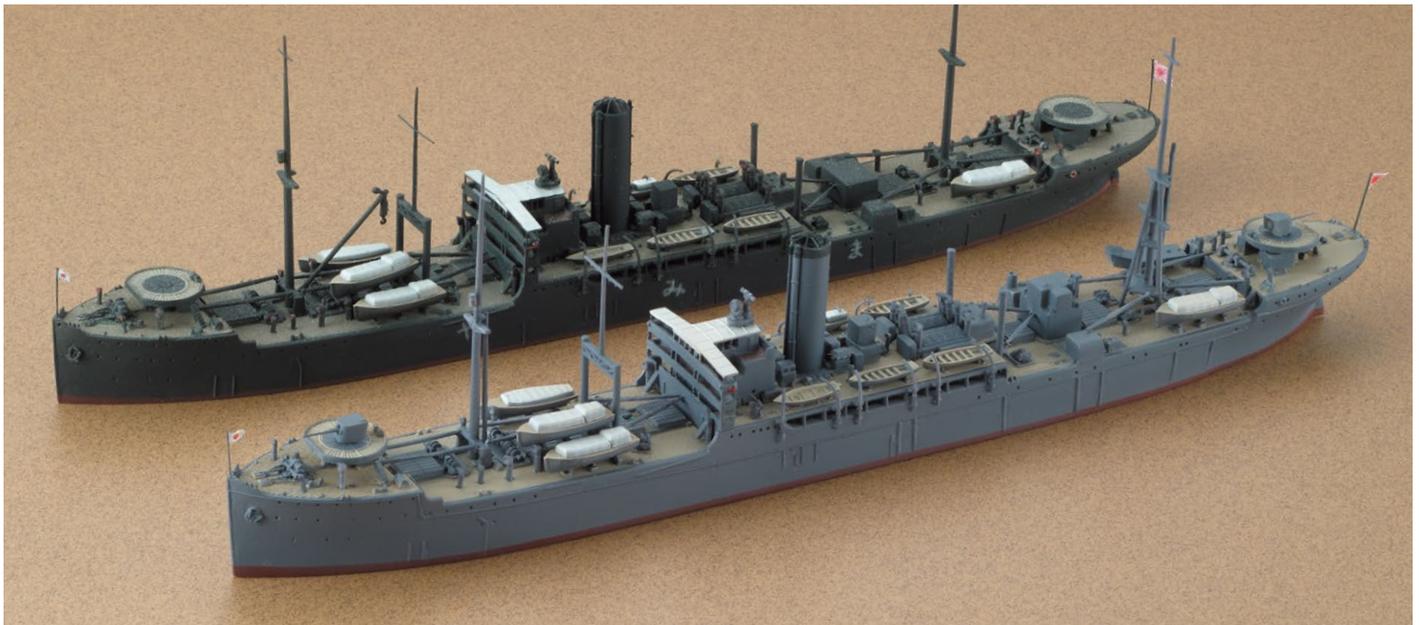
Specification

基準排水量 1万5820トン
 全長 150.93m
 最大幅 18.59m
 主缶 口号艦本式缶 8基
 主機 直立式3気筒3段式レシプロエンジン 2基 / 2軸
 出力 1万馬力
 速力 満載状態 14ノット (満載時) / 17ノット (軽荷時)

搭載能力 重油2100トン、石炭1500トン、清水830トン (補給物件として)
 1万8000人の3週間分の食料補給、艦内での加工食品の製造など
 兵装 14cm単装砲2基
 8cm単装高角砲2基



- | | | | | | |
|-------------|-------------|---------------|---------------|-----------|----------------|
| 1. 14cm砲座 | 4. 12m配給艇 | 7. 9m内火艇 | 10. 28フィート内火艇 | 13. 洗濯機室 | 16. 20tデリック |
| 2. 1.5tデリック | 5. 8cm高角砲 | 8. 30フィートカッター | 11. 方位測定室 | 14. 豆腐製造所 | 17. 第一種標的船搭載位置 |
| 3. 1.5tデリック | 6. 20フィート通船 | 9. 27フィート通船 | 12. 乾燥機室 | 15. 鍛冶工場 | |



「間宮」の妹分「伊良湖」の物語と作例は本書第2巻『ジミ艦2』に掲載

「間宮」と同じ神戸川崎造船所で建造された「伊良湖」は同造船所の「間宮」での経験を踏まえて各所に改良が加えられ、大東亜戦争開戦の僅か3日前の1941年12月5日に竣工した。船体の大きさは「間宮」とほぼ同程度だが排水量は6割ほどに抑えられ、主機は敷設艦「津軽」と同形式の艦本式タービンを搭載。重油節約のため石炭混焼缶とされた。食品への煤の混入を防ぐため非常に高い煙突を持つ。食糧の補給能力は2万5000人の14日分。これは「間宮」に若干劣るが、2基のヘビーデリックと8基の2トン電動ジブクレーンを備え、荷役の効率は格段に向上させている。また名物の菓子類は1日あたり大福餅1万個、焼き饅頭2万個、モナカ6万個、羊羹2200本、アイスクリーム5000個が生産可能だった。その他、1日あたり夏服400着を仕上げられる洗濯設備も設置されていた。また「間宮」と同じく通信監査艦の任務も持ち、長波・短波兼用の九二式特受信機30台が設置された。

特務艦のインジェクションプラスチックキットは2010年代から徐々にラインナップされてきているが、模型誌の特集記事などで主役を張ることはまだまだ少ない。「ジミ艦2」ではこの「伊良湖」のほか給油艦「足摺」、潜水母艦「大鯨」護衛艦「わかば」なども紹介している。



▲「伊良湖」のキットはビットロード・スカイウェイブシリーズより発売中。「ジミ艦2」では、姉貴分の「間宮」より知名度が低いせいか、他の書籍ではあまり取り上げられていない「伊良湖」のエピソードとベストメイクアップを紹介している



帝国海軍標的艦 摂津

Imperial Japanese Navy Target ship Settsu

砲撃的として、操艦技術の稽古台として「月月火水木金金」と謳われた帝国海軍の猛訓練を陰で支えたのは、わが国初の弩級戦艦だった……。新技術の開発にも寄与した標的艦の物語。

■初の実用的標的艦

標的艦とはその名前のとおり、砲撃、爆撃の訓練や新型砲弾の実験などで標的として使うことを目的とする艦である。自走して自らが的となり、訓練に繰り返し使用される標的艦は、わが国では1930年代まで存在しなかった。それまでの標的艦とは、砲撃訓練的として使用する布の幕や、のぼり旗を何本も立てた筏を曳航する艦を指すものだった。危険防止のため筏は長い曳航索で繋がれるため自在な動きは望めず、風の強い海上では幕やのぼり旗も影響を受け、実地訓練としては不満足なものだった。こうした問題を解消したのが標的艦「摂津」であった。かつて大正天皇の御召艦も務め、連合艦隊の花形だった彼女は、紆余曲折の末この任務に就いた。

■日本初の弩級戦艦

1906年、「弩級」という言葉を生んだイギリス戦艦「ドレッドノート」の出現によりそれまでの戦艦は時代遅れとなった。当時我が国では初の国産戦艦の薩摩型が建造中であったが、竣工前に見劣りするものとなってしまった。世界各国で弩級戦艦の建造が始まり、わが国でも明治40年（1907年）度の補充計画で初の弩級戦艦の建造を決定。1912年3月にネームシップの「河内」、7月に二番艦「摂津」が竣工した。ともに近畿地方の令制国名を授けられた姉妹の主砲は30.5cm連装砲6基12門とされたが艦首尾に置かれる1番・6番砲には50口径、両舷に設置される2～5番主砲塔には45口径の砲を搭載した。日露戦争の戦訓から首尾線方向への火力を強める意図があったが、同一の主砲を多数搭載し統一指揮を行うという弩級戦艦の必須条件を満たしておらず、河内型は準弩級戦艦ではないかという意見もある。しかし実際の運用では、装填量の

違う2種類の薬莖を使用して初速を合わせているため統一指揮を可能としていたが、遠距離での射撃管制は困難だった。“おまけの”弩級戦艦という位置づけである河内型の就役した年、イギリスでは超弩級戦艦と称されるライオン級巡洋戦艦が竣工。大艦巨砲主義の幕開けとなっていた。わが国でも続く「金剛」はイギリスに発注され、一足飛びに超弩級戦艦の時代に突入した。金剛型に続き扶桑型、伊勢型が続々と就役していた1918年7月12日、徳山湾で「河内」が1番砲塔火薬庫の爆発を起こし沈没。「摂津」は僚艦を失ってしまった。

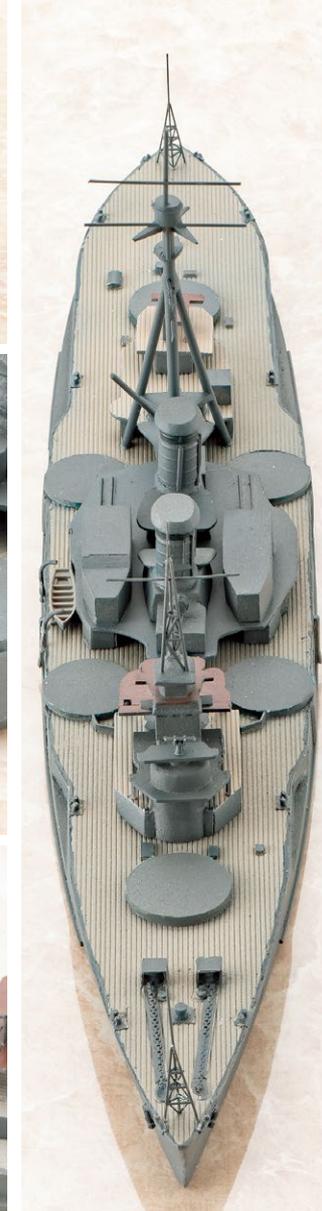
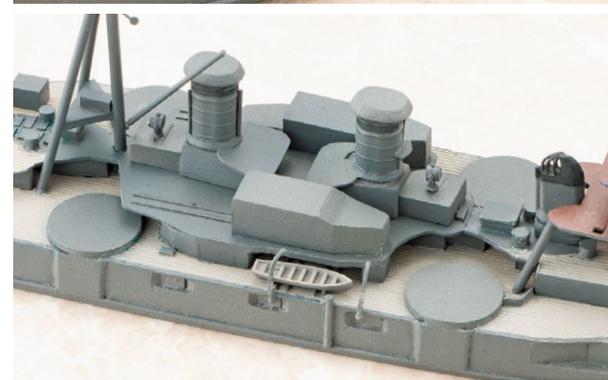
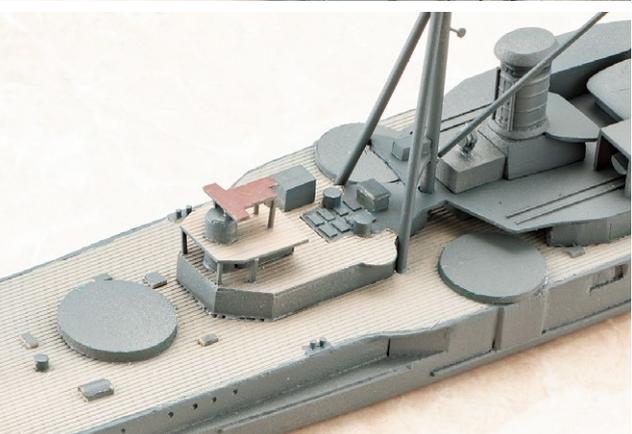
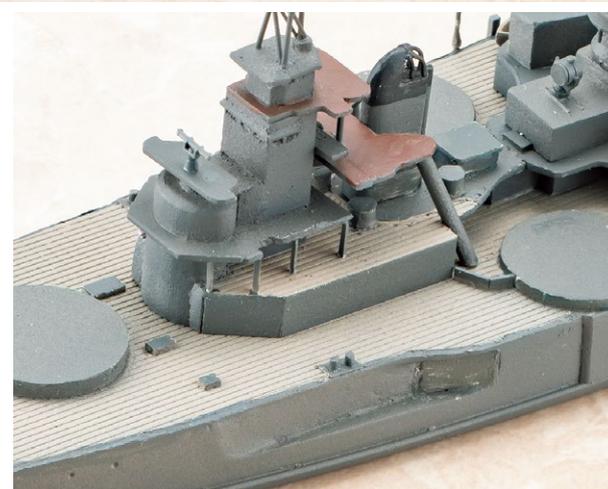
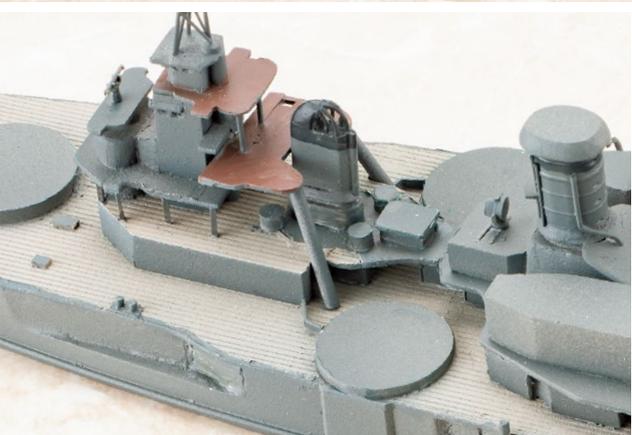
■ワシントン軍縮条約

1921年2月6日、ワシントン海軍軍縮条約が締結された。主力艦（戦艦・巡洋戦艦）の新規建造は凍結、日本海軍の保有量は31万5000トンとされた。当時日本海軍では「摂津」のほか金剛型4隻、扶桑型2隻、伊勢型2隻と長門型2隻を保有しており、条約の取り決めを満たすため金剛型で近代化改装の遅れていた「比叡」が練習戦艦とされた。また、前年の11月11日に会議が開催された時点で竣工に至っていないものは未成艦として処分の対象とされていた。長門型二番艦の「陸奥」は、当時の工事進捗率は85%ほどだったが、書類上は10月24日竣工とされていた。アメリカとイギリスは「陸奥」を未完艦とみなしていたが日本側は強く反発。最終的に「陸奥」の保有は認められたが、代わりに廃棄が決まっていたアメリカ・コロラド級2隻の建造続行と、イギリスの後にネルソン級となる戦艦2隻の新造を認めるという取り引きをさせられ、損をしたのは日本側だったともいわれる。こうして「陸奥」の代わりに「摂津」が退役させられることになった。しかし、廃艦とする主力艦のうち1隻は標的艦に変更することで保有が認められていたため彼女は辛うじて生

き残ることができた。

■無線操縦標的艦「摂津」誕生

1923年10月1日、摂津は軍艦籍から除かれ、砲兵装や装甲など戦闘艦としての装備を全廃した。彼女の50口径12インチ連装砲2基は陸軍クレーン船「蜻蛉丸」によって長崎県対馬要塞まで運搬され要塞砲として使用された。標的艦として命をつないだものの、その頃の彼女は、標的となる目標を曳航するのが任務であり、ワシントン軍縮条約で廃艦となり、砲撃などの実験に供された戦艦「土佐」を自沈地点まで曳航する役割などを務めた後、数年後には予備艦となり呉軍港に係留されていた。その頃、日本海軍では、ある新技術開発のための研究が進められていた。その発端となったのはワシントン軍縮会議が開催された1921年、外国雑誌に掲載された『ドイツが戦艦の無線操縦に成功した』という記事だった。これに触発された海軍は無線操縦装置の研究を進め、1923年には水雷艇を使った実験にも成功したが、関東大震災により機材が消失。開発は頓挫してしまう。しばらくのブランクの後、1925年に設置された海軍技術研究所電気研究部に研究を再開させ、1928年には電動機と電池を用いたラジコン装置を開発。駆逐艦「卯月」での実験に成功して、一段ステップを上がった。次なる課題はラジコン装置で操縦する艦を自在に航行、停止するためのボイラーの自動制御であった。折しもドイツのアスカニア社がボイラーの自動噴燃装置を開発との報を受け、これを輸入することでシステム完成の目算が立った。舞鶴工廠で建造中の駆逐艦「夕暮」に試作品を仮装備して実験を重ね、遂に完成した装置は呉工廠に送られ、1937年1月、「摂津」の無線操縦爆撃標的艦への改装が開始され7月に完成した。標的艦への改装に



あたり10kg演習用爆弾の高度4000mからの投下に耐えられるよう甲板・艦橋・煙突等の防御を強化。機関部は新たに搭載した口号艦本式重油専燃缶4基のうち2基に自動噴燃装置を装備した。遠隔操作の方式は、電信符号を800Hz、930Hz、1100Hz、1300Hzの4つの低周波に変調させ、それぞれにW、X、Y、Zと符丁を付けそのうち3つを組み合わせて命令信号とするものだった。命令は針路管制14種、速度管制8種、その他15種の合計37種があり、煙幕展開の機能も付与された。これらの管制は操縦艦を務める駆逐艦「矢風」に搭載される調波送受信機と押しボタン式の操縦盤で行うものとし、コンビでの活動が始まった。“無人”といっても、実際の演習時には「摂津」の整備担当者が乗り込んで演習予定海面まで操艦し、艦を待機させると各部に移乗がないかチェックしてから「矢風」に移乗する。波の高い外洋では、この移乗にも危険を伴う。整備担当者は砲爆撃が開始されると心中では『どうか当たりませんように』と祈るのだという。何しろ「摂津」には苦心して整備した精密な装置が一杯詰まっているのだ。「矢風」からの操作もいつもスムーズというわけではなく、高速航行やジグザグ航行、うねりの強い海面での振動や命中弾による衝撃、湿度や塩害による影響など、故障や誤作動などの要因とは隣り合わせであった。演習が終わると整備担当者は大急ぎで「摂津」に戻り、怪我の手当てに精を出した。

■操艦技術道場「摂津」

1939年、わが国が志那事変から大東亜戦争に向

かう中、「摂津」は第二次改装工事を実施した。この改装は彼女を砲撃訓練、及び航空機の雷・爆撃訓練のみならず操艦側の回避訓練にも使用可能とすることを目的とするものだった。無条約時代を迎え、軍縮条約によって取り外していた舷側装甲を復活。10kg演習爆弾の高度6000mからの投下、30kg演習爆弾の高度4000mからの投下、射距離2万2000mからの20cm演習砲による砲撃、射距離5000mからの14cm演習砲による砲撃などに耐えられるよう艦の上部構造物や水平面の防御を強化した。また回避操艦訓練のため速力が求められ、休止していた第二缶室に戦艦「金剛」の近代化改装で陸揚げされていた缶を搭載。第二煙突を復活して煙突は3本になった。砲撃訓練時、乗組員は退艦して無人状態となる。爆撃訓練時、乗組員は防衛区画で操艦を行う。真剣勝負の実戦さながらの訓練を可能とした。大東亜戦争開戦時に「摂津」の艦長を務めた松田千秋大佐（当時）は日本海軍初の戦術マニュアルといわれる「爆撃回避法」を考案。これに沿って操艦すれば爆撃の命中率が低下すると説き、第一航空戦隊の訓練では雷爆撃を全弾回避するという離れ業をやったのけた。第四航空戦隊司令長官を務めた1944年のレイテ沖海戦では麾下の「伊勢」「日向」を激しいアメリカ軍機の空襲下から生還させたことでその有効性を証明して見せた。「大和」の艦長も務めた彼は、若き日に「摂津」の姉妹艦「河内」にも乗艦している。1940年5月1日付で連合艦隊に編入された「摂津」と「矢風」は同年横浜港沖で行われた紀元二千六百年特別観艦式に揃って参列

した。しかし、大戦に突入し航空機搭乗員の養成に「摂津」だけでは標的艦が手薄になったことから「矢風」も標的艦としての改装を受け、南方に進出。無線操縦装置は1944年10月に撤去された。戦時には瀬戸内海で訓練に従事していた「摂津」を1945年7月24日、アメリカ軍機の大編隊が襲う。操艦訓練の道場として鳴らした彼女も実際の敵の大空襲にさらされてはひとたまりもない。大破着底した彼女はそのまま終戦を迎え、戦後に解体された。標的艦に改装の際に取り外された彼女の主砲1門が、のちに福岡県の香椎宮に寄贈され、現在も保存されている。

■「摂津」を作る

明治期に建造された古い艦でありながら装甲された各部はどこか斬新に見え、新・旧が混在した魅力的な姿をもつ標的艦「摂津」。元戦艦なので大きさもそこそこあり、模型映えのする艦であるがキットは未だ発売に至っていない。戦艦時代のモデルは工房飛竜のレジンキャストキットがあったが現在では入手困難だ。改造して使用できそうな船体も見当たらず、流用できるパーツもほとんどないため、作例はプラスチック素材を主体としたフルスクラッチビルドで製作した。「摂津」の資料は大和ミュージアム所蔵の公式図面があり詳細がよくわかるが、写真が少ないため立体的なイメージをつかむのが難しい。特に艦橋構造物の細部や煙突周囲の詳細は図面では把握しきれず、作例はやや簡略化した構成とした。

■船体

舷側に設けられた副砲の砲郭を組み入れるため、船体は上下に分けて製作する。まず底板とプラ板から切り出し、中央に背骨を入れる。舷側板は湾曲させたプラ材で構築し、背骨と舷側板の間に適宜補強材を入れたあと中甲板を接着したら船体の下半分は終了。もう一度中央にキールを入れ上甲板を構築するが、キールは艦首尾にシアアが付き、軽くせり上がった形とする。舷側板は砲郭の部分に切り込みを入れた形で構築し、補強材を適宜入れて上甲板を接着する。上甲板は戦艦時代のままの板張りであるため、エバグリーン社の筋入りプラ板（Vグループ0.64mm）で製作した。上甲板を貼ったら舷側の空所をプラ材やパテで埋めていく。完全に固まったら艦首のフレアや艦尾吃水線部の丸みなどに気をつけながらヤスリやモーターツールを駆使してバリバリ削っていく楽しい作業である。大体の形ができたなら舷側全体に溶きパテなどを塗りつけ、キズ消し・磨きの作業を行う。面が整ったら防舷材や錨口のベルマウス、舷窓などのディテールを表現して船体の基本工作は終了。甲板の工作に移る。艦首の揚錨機は防御用の覆い

が付けれられているので、本体をプラ棒で造った後、薄いプラ板を箱組みして周りを囲った。主砲パーベツは艦首尾（1番、6番）を直径12.5mm厚さ1.5mm、両舷（2～5番）を直径12mm厚さ1mmとしてプラ板から切り出して取り付けた。

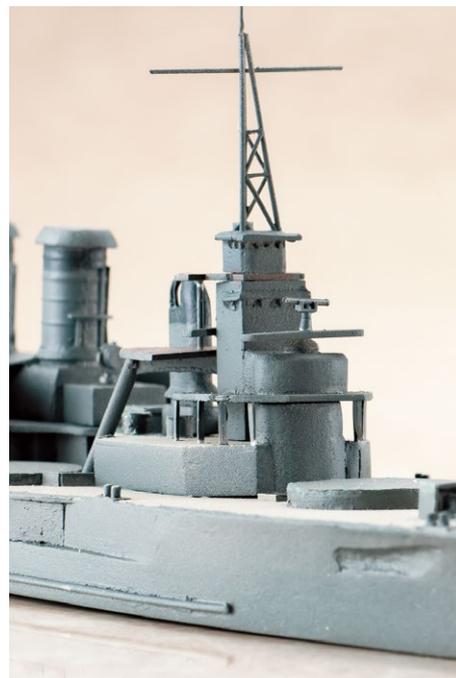
■上部構造物

最上甲板は0.5mm厚のプラ板と、一部板張りとなっている部分を筋入りプラ板で組み合わせて製作した。甲板下の諸室は密集しておらず、通り抜けられるような構造になっている。右舷の9mカッター搭載位置は被爆時には甲板下にカッターを避難させるためのレセスが設けられている。艦橋はプラ材の組み合わせで構築。シンプルな形だが、構造物と一体になった前檣はもともと三脚檣だったものを、支柱が途中で切断されているのが見て取れ、面白い造形となっている。第一煙突はプラ材からの削り出し、第二・第三煙突は本体をジャンクパーツの5500トン級軽巡のものを高さ調整して使用、下部をプラ材の組み合わせで製作した。煙突上部にはそろばん玉のような防御覆いが取り付けられ複雑な構造になっているが、作例では簡略化した表現とした。煙突の左右にある端艇格納

所の防御覆いはこの艦の面白い特徴のひとつだろう。右舷が12m内火艇、左舷が12m内火ランチ用で、艇の形に合わせて屋根の形が左右非対称となっている。プラ板の箱組みで製作して中が見えるようにしてみたが、戦後の写真を見ると、観音開きの扉が設けられていたようである。煙突の前後に設置された110cm探照灯は、普段は格納されているため取り付けなくても良いが、無武装で艦装品もきわめて少ないため間延びした感もあったのでジャンクパーツから拾って取り付けしてみた。艦首尾にある高い空中線支柱は0.3mm径のプラ材で組んで取り付けた。

■参考文献

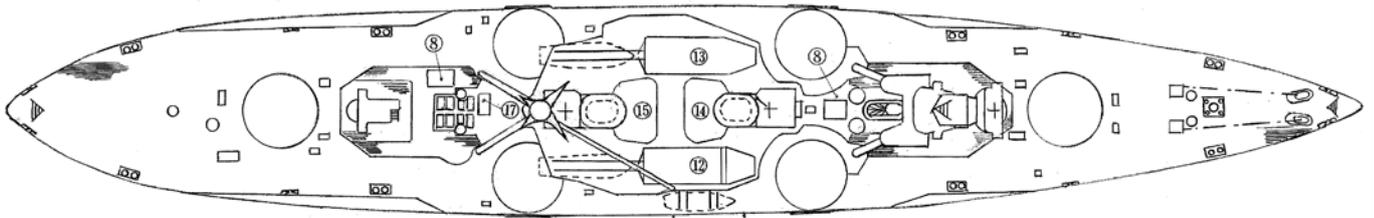
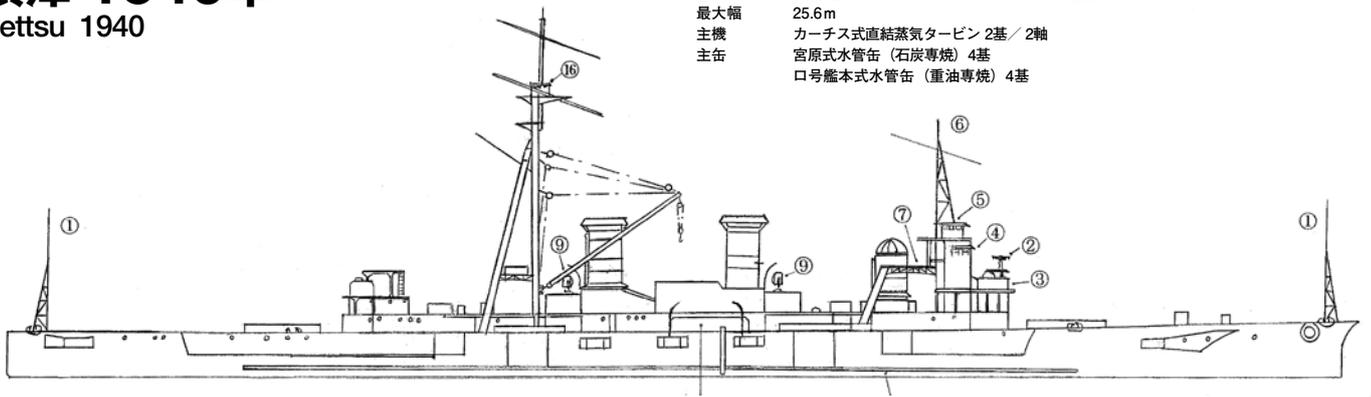
海軍艦艇公式図面集 / 今日の話題社
写真 日本海軍全艦艇史 下巻 / KKベストセラーズ
日本海軍艦艇写真集 巡洋艦 / タイヤモンド社
丸スペシャルNo.34 特務艦 / 潮書房
世界の艦船増刊No.890 日本海軍特務艦艇史 / 海人社
歴史群像太平洋戦史シリーズVol.37 帝国陸海軍補助艦艇 / 学研
軍艦メカ開発物語 / 光人社
資料協力 大平陸雄氏



摂津 1940年

Settsu 1940

Specification	基準排水量	2万650トン	出力	1万6000馬力
	全長	160.6m	速力	17.4ノット
	最大幅	25.6m		
	主機	カーチス式直結蒸気タービン 2基 / 2軸		
	主缶	宮原式水管缶 (石炭専焼) 4基		
		口号艦本式水管缶 (重油専焼) 4基		



- | | | | | | |
|------------|----------|-------------------|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 空中線支柱 | 4. 羅針艦橋 | 7. 信号所 | 10. 防舷材 | 13. 12m内火ランチ格納所 | 16. 爆弾弾着観測所 |
| 2. 2.5m測距儀 | 5. 上部指揮所 | 8. 海水タンク | 11. 9mカッター格納所 | 14. 第二缶室給気路 | 17. 真水タンク |
| 3. 司令塔 | 6. 信号橋 | 9. 110cm探照灯 (煙鏡式) | 12. 12m内火艇格納所 | 15. 第三缶室給気路 | |



▲1940年4月、呉で撮影された有人方式による標的艦として完成した「摂津」の雄姿。通常運転では石炭専焼の宮原式水管缶を使用するため、第一煙突から黒煙がたなびいている。主柱が撤去され、短く切断された斜めの支柱のみが残された前櫓や煙突上部

の防御覆い、端艇の格納庫など、彼女の特異な艦容を明瞭に捉えている。空中線支柱を兼ねた艦首の旗竿に日章旗、艦尾には軍艦旗が掲揚されているが、訓練行動時には後櫓背面に突き出したガフに軍艦旗が掲げられる。彼女は大東亜戦争開戦後も訓練標的艦

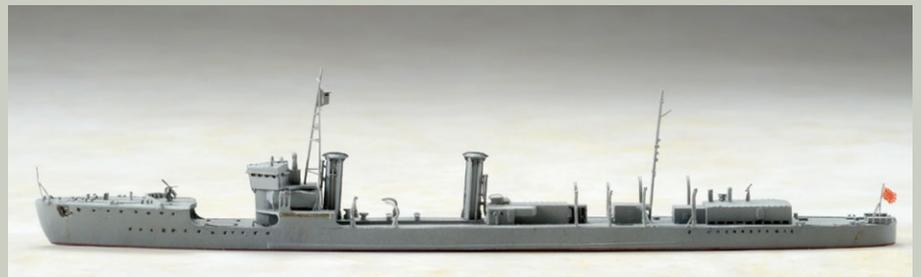
として終始内地にあったが鮮明な写真は少なく、きわめて貴重な一葉となっている。フラッシュデッカーの船体をもつ彼女は日本戦艦の中では非常にシンプルな姿であり、スクラッチビルドには向いているかもしれない

鉄人28号と正太郎少年 よき相方であった標的艦「矢風」

峯風型駆逐艦の5番艦として1920年7月19日、三菱長崎造船所で竣工。第一次上海事変などに参加後、1937年以降は兵装の一部を撤去し駆逐艦籍のまま「摂津」の無線操縦艦となり、砲撃訓練の際には彼女の送信する命令信号による遠隔操作で「摂津」を操るといふ、よき相方であった。大東亜戦争開戦後は爆撃標的艦の需要が高まり、また「摂津」は18ノットと低速で運動能力も低かったため速力24ノットを発揮可能な「矢風」に白羽の矢が立ち、1942年3月から5月にかけて爆撃標的艦に改装することとなった。1942年7月20日に特務艦に編入され標的艦となった彼女は南方に進出し、ルオット、トラック、タロアなどの根拠地で爆撃訓練に従事したが、次第に戦況が悪化すると若干の小口径砲と機銃を増備して船団護衛任務に駆り出されるようになった。1943年3月には船団護衛中に第34号哨戒艇と衝突して艦首を失い、1944年1月にはアメリカ潜水艦との戦

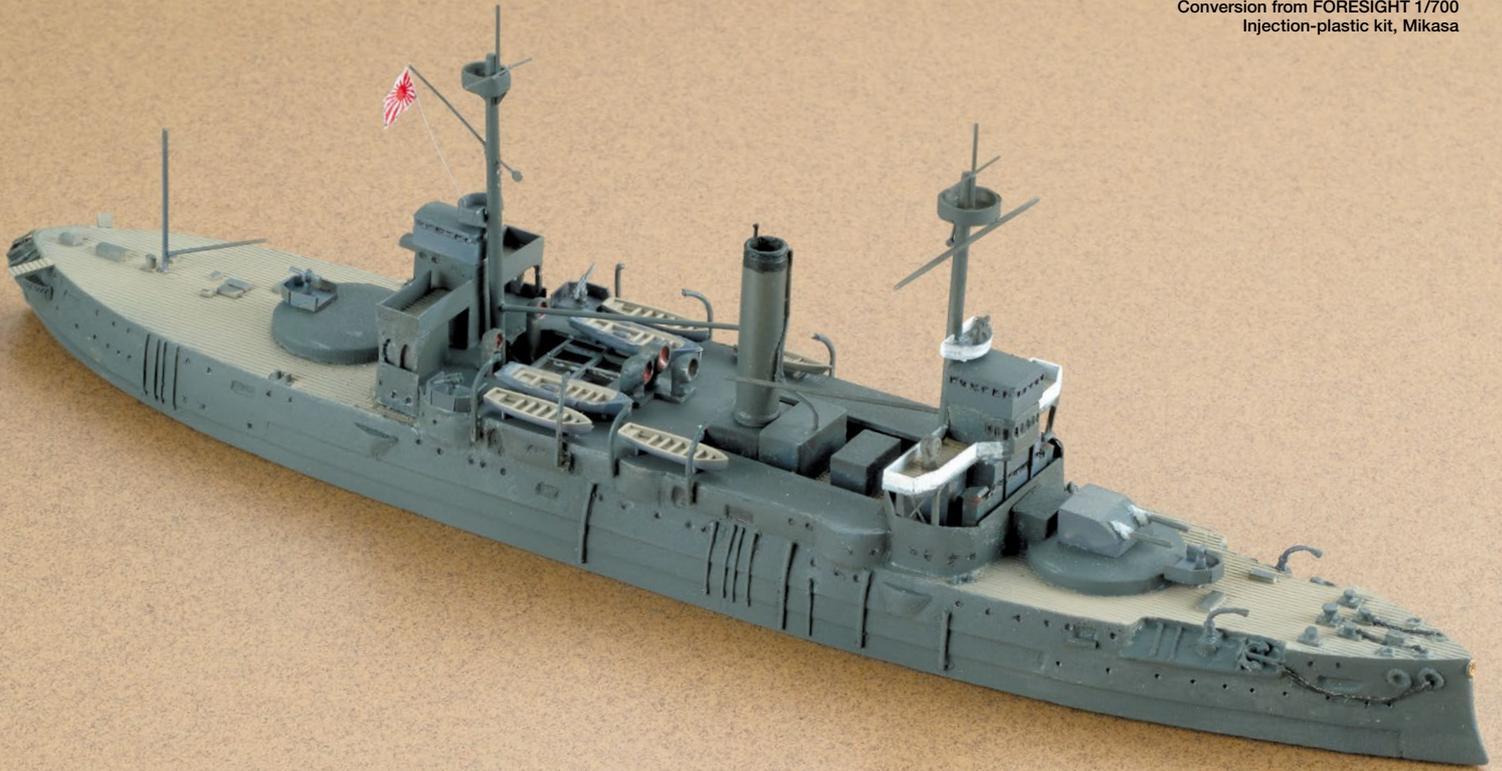
闘中に油槽船「玄洋丸」に衝突して艦首が屈曲するなど苦戦が続いたが生き延びた彼女は、その後内地に戻り爆撃訓練に従事したが1945年7月18日 横須賀港で空襲を受け損傷。そのまま終戦を迎え、戦後は長浦湾に係留されていたが本格的な修理がなされなかったため

浸水により着底。1948年7月から9月にかけて解体された。本艦は『ネイビーヤード』が発刊されたときの連載第一回として掲載され、本書の第一巻「ジミ艦」にも収載されているので、興味のある方はぜひご一読ください。



帝国海軍工作艦 朝日
フォーサイト1/700
三笠より改造

Imperial Japanese Navy Repair ship Asahi.
Conversion from FORESIGHT 1/700
Injection-plastic kit, Mikasa



帝国海軍工作艦 朝日

Imperial Japanese Navy Repair ship Asahi

戦艦～海防艦～練習特務艦～潜水艦救難艦～工作艦……。
肩書を目まぐるしく変えながら激動の45年を生きた老艦の物語

■戦艦朝日と広瀬少佐

日露戦争を戦った戦艦で唯一、第二次大戦時も稼働していたものは……？

同時期戦艦として活躍した「富士」「敷島」も海軍の艦籍にあったが、両艦とも練習特務艦として推進器を取り外され、「富士」は横須賀に、「敷島」は佐世保に保留されたままの状態となっていた。元気に働いていた元戦艦は「朝日」を置いて他にいない。彼女は、いわゆる六六艦隊計画の第二号甲鉄戦艦として計画され、1897年8月18日、イギリスのジョン・ブラウン社で起工。1899年3月13日に進水した。基本的には先の「敷島」と同型とされ、缶数は25と同数だが、煙突が3本から2本に減少し、上部構造の艤装が一部更されている。また水密区画の数が261から288に増え、浸水に対して抗堪性が向上している。1900年3月、竣工に先立つ公試中、サウスシー海岸で座礁。前部砲塔下の艦艇部に挫屈を生ずる事故を起こした彼女は、予定より約3カ月遅れの1900年7月31日に引き渡しとなり、その日に日本へ向け出港。回航委員長は上村彦之丞大佐が務めた。10月23日横須賀港に到着したが、燃料消費量が計画以上に大きいという問題があって直後に予備艦となり、11月からおよそ半年間、横須賀で船体と機関の修理を受け、常備艦隊編入は1901年5月22日となった。

1902年4月、広瀬武夫少佐が「朝日」水雷長兼分隊長に任ぜられた。彼はロシア駐在武官を務めていた際の1900年5月、秋山真之と共に竣工間近だった「朝日」を見学を訪れており、この着任をとても喜ん

でいた。文才にも長けていた広瀬は『朝日艦の歌』を作り、艦歌として乗組員に歌われるようになった。後に多くの艦で乗組員の愛艦精神を高めるため艦歌を作ることが流行したが、「朝日」がその先駆けとなった。

1904年、日本はロシアに宣戦布告。同年2月～5月までに3度実施された旅順港閉塞作戦で閉塞船を指揮した広瀬は、3月27日の第二次作戦で戦死する。1903年6月より「朝日」乗組となった部下の杉野孫七二等兵曹と意気投合し、寝食を共にしていたという広瀬は、この作戦で行方不明となった杉野を捜索し、ロシア軍の陸上砲の直撃を受け壮絶な最期を遂げた。戦死後、中佐に進級して最初の「軍神」と謳われた彼の「朝日」艦内の私室は「軍神室」あるいは「記念室」と呼ばれて保存されていた。

日露戦争での「朝日」は、「三笠」を旗艦とする第一艦隊・第一戦隊の4番艦として、旅順港閉塞作戦、黄海海戦、日本海海戦に参加した。1904年10月26日には左舷後部に触雷、1905年5月27日の日本海海戦では被弾数6、戦死者8、負傷者23の被害を被ったが武運よく、装甲巡洋艦「浅間」と共に、降伏したロシア戦艦「オリョール」を護衛して帰国した。戦利艦の「オリョール」は「石見」と改名してわが海軍の一員となった。

■海防艦～潜水艦救難艦へ

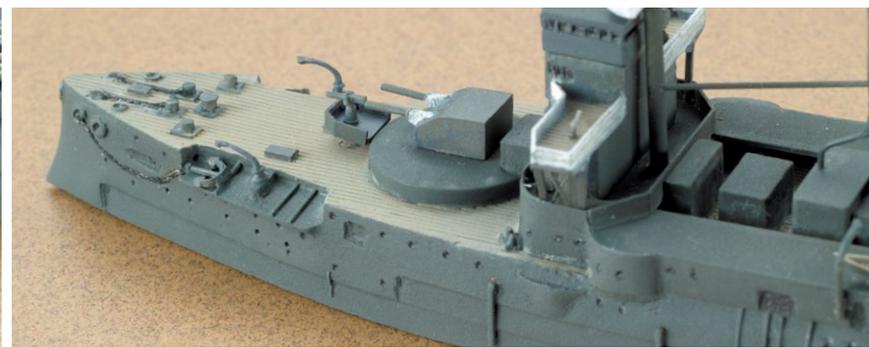
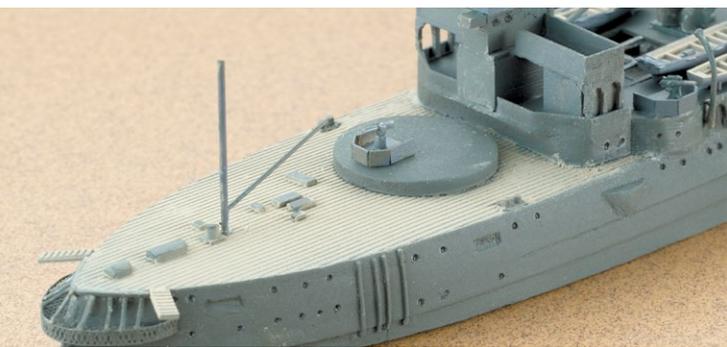
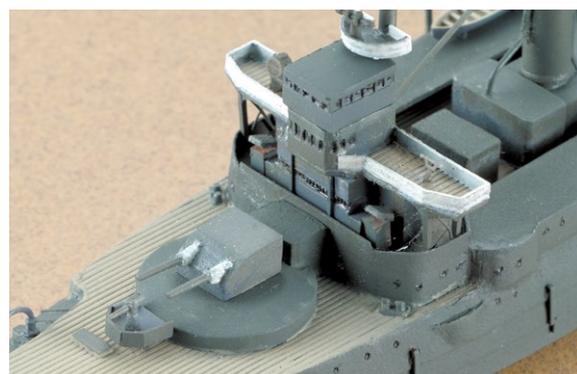
日露戦争後の「朝日」は1908年3月、伊良湖水道で触礁。1909年7月には伊豆諸島近海で演習中に副砲の筒発事故で死者4名を出すなど相次いで事故に

見舞われた。1910年12月1日～1912年3月1日には皇族軍人の伏見宮博恭王大佐が艦長を務めている。この頃には“ド級戦艦”の出現により、既に二線級となっていたが、第一次世界大戦末期の1918年1月13日、第三艦隊第五戦隊の旗艦として、ウラジオストク方面の警備に出動した。同方面の警備には先に「石見」が派遣されており、来久しぶりの再会となった。同年8月5日、「朝日」は横須賀に帰投。第一次世界大戦終結後の1921年9月1日、日露戦争時の主力艦艇は海防艦に類別変更となり、「朝日」も一等海防艦となった。

1923年2月6日、ワシントン軍縮条約が締結されると「朝日」より新しい戦艦たちも廃棄の対象となったが、彼女は非戦闘用の練習艦として残された。兵装、装甲を廃し、練習特務艦となった彼女は同年4月1日、軍艦籍より除籍された。主砲塔と全ての兵装、装甲板を撤去したことにより、彼女の舷側は大きく凹んで、排水量の減少で吃水は浅くなった。

第一次大戦を共に戦った「石見」は「朝日」に曳航され、三浦半島南端の城ヶ島沖で陸海軍共同の航空機による爆撃実験の標的として処分された。

この頃、潜水艦の増勢に伴って沈没事故が相次ぎ、救難のための艦艇が必要とされた。そこで、当面使いみちのなかった「朝日」が救難艦への改装対象として選ばれ、1925年～26年にかけて改装が行われた。救難設備は、左右両舷に設けた巨大なブラケットにワイヤを取り付け、片舷に救助する潜水艦を固縛、反対舷に廃艦となった潜水艦を沈没船（バラス



ト)として海中に沈め、井戸の「釣瓶」の原理により比較的少ない力で遭難した潜水艦を吊り上げるという仕組みだった。救難設備の設置はひとまず横須賀で実施され、25年8月にはドイツから接收した第一次世界大戦の戦利潜水艦を用いた実験が行われた。その後、呉に回航された彼女は、実験の結果を踏まえ更なる改装を受けた。その際缶の換装も実施され煙突は1本となった。また1926年1月の訓令により試製呉式1号射出機実験装備の訓令が出された。改装は10月30日に完成し、わが海軍初の潜水艦救難艦となった彼女は、その特異な姿を披露した。翌年2月～5月には帝国海軍初の航空機射出実験を実施。9月と翌年6月に潜水艦救難実験を行い、まずまずの結果を残した。彼女は潜水艦事故に備え呉に常駐していたが救難の機会はなく、潜水艦の大型化などに

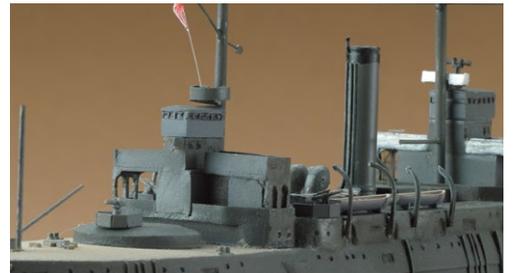
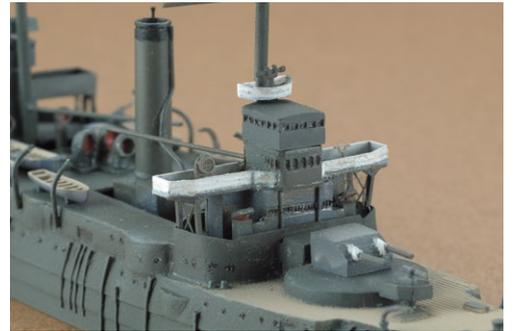
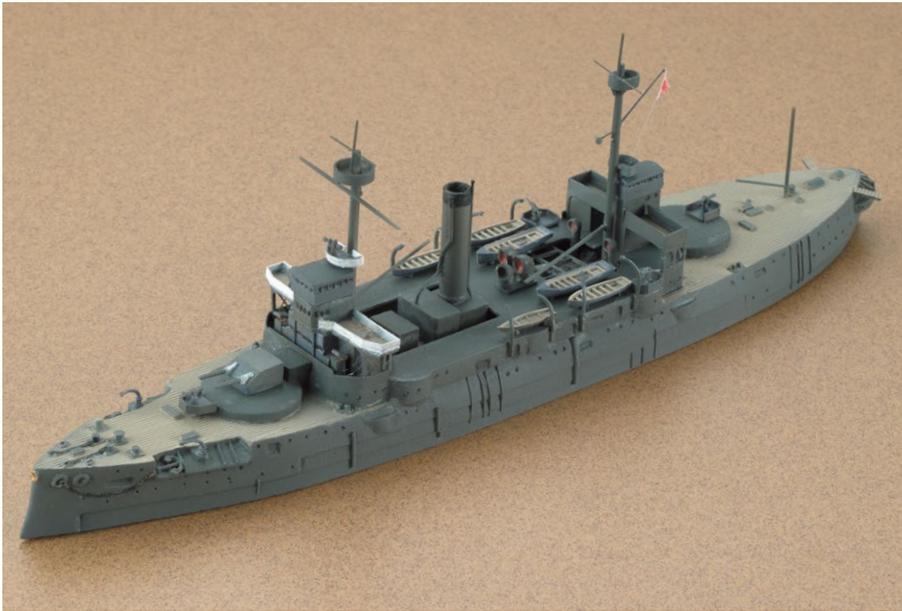
より釣瓶式の方法では救難に適さなくなったため設備は撤去された。彼女に代わり、知床型給油艦「佐多」が潜水艦救難艦に改造され、二度の沈没潜水艦浮揚に成功している。

■工作艦朝日

その後は練習特務艦として海兵団の訓練などに従事していた彼女に再び活躍の機会が訪れた。工作艦「関東」が1924年に座礁放棄され、1931年「朝日」に簡単な工作艦設備が設置されたが、第一次大戦後の「海軍休日」のためこの種の艦の活躍の場はなかったこともあり、帝国海軍は工作艦を保有していなかった。ところが1937年、支那事変が勃発。損傷艦も増加したため、海軍は「朝日」を工作艦として使用することを決定した。同年8月中旬、数日間の突貫作業で所要の工事を終えた彼女は、16日、工作艦（公

式類別は特務艦)に類別変更され、8月18日上海に進出。損傷艦の修理や整備に忙しく働いた。小口径砲以外の武装を持たない彼女は、砲塔撤去跡に木材と帆布で拵えた虚偽偽しの「偽砲塔」を置いて黙々と任務をこなした。広瀬中佐の“軍神室”は改装後も残され、1939年3月には三十五回忌が営まれた。1940年11月、本土へ帰還した「朝日」は11月15日付で連合艦隊付属となり、彼女が上海駐留中の1939年7月に竣工した新造工作艦「明石」と共に、猛訓練に明け暮れる連合艦隊各艦の修理や整備を行った。

1941年の太平洋戦争開戦時、「朝日」は仏印カムラン湾で南方作戦に参加した潜水艦や輸送船の整備、修理に精を出していた。日本軍は破竹の勢いで1942年2月にシンガポールを占領すると3月13日、彼女は「明石」と共に同地に進出。港湾施設の復旧や、



潜水艦の雷撃で損傷した給油艦「鶴見」や軽巡洋艦「那珂」の応急修理に第101工作部との共同で従事。海軍の第一段作戦を支援した。

艦齢40年を超える老体に鞭打って、ここまで働き詰めだった彼女は、南方進攻が一段落した同年5月22日シンガポールを出発。入渠修理のため駆潜艇1隻の護衛で、内地へ向かったところ、5月25日の深夜に哨戒活動中の米潜水艦「サーモンSS-184」にカムラン湾南東のサイゴン沖約120哩で雷撃される。左舷に2発の魚雷が命中した老艦は5月26日午前1時3分、転覆して沈没した。最初の魚雷は広瀬の軍神室の直下で炸裂し、保存されていた遺品は艦と共に海中に没した。しかし、軍神のご加護があったのか、犠牲者は20名ほどに留まり、大半の乗組員は救助された。

軍神となった広瀬を記するため1935年、当時の首相岡田啓介らの尽力で、彼の出身地である大分県竹田市に広瀬神社が建立され、広瀬の最初の乗艦であったコルベット「比叡」のマストと「朝日」のカッターが奉納され、現在も残っている。また「朝日」と特設工作艦「山彦丸」「山霜丸」の合同慰霊碑が呉市の長迫公園にあり、縁の下の力持ちとして働いた彼女らと乗組員たちの奮戦を今に伝えている。

■「朝日」を作る

「朝日」のキットは1/700では発売されていない。作例はフォーサイトから発売されている準同型艦の

「三笠」をベースにスクラッチビルドで製作した。工作艦に改装され中国で活躍した1937年頃の状態を再現している。工作艦時代の本艦の資料は少ないが、『日本帝国海軍全艦船1868-1945（第1巻）戦艦・巡洋戦艦/石橋孝雄編・著』に記載の戦艦時代の図面や、Webサイトではgooブログの『艦船、つれづれ雑記帖』が非常に参考になる。

■船体

ベースに使用する「三笠」の船体は、全長が約4mm長く、最上甲板や舷側の形状なども大きく異なる。それでも、“骨格”となる船体があった方が作業性は断然良いだろう。左右分割となっている船体パーツは、予め最上甲板の外壁の部分を切除してから貼り合わせ、中央付近で一旦2つに分割して、4mm縮めてから再度接着するが接合部の強度が弱いので、補強のため底面の内側にプラ板の端材などを貼り付けた。工作艦時代の「朝日」は吃水がかなり上がっているため、底面に船体の外周に合わせてカーブさせた2mm角のプラ棒を貼り、乾舷の高さを増している。舷側のモールドは全て削り取り、エバグリーン社の筋彫り入りプラ板（Vグループ0.64mm）から切り出した上甲板を接着。そのあと、装甲を取り外して凹になった所の形を0.5mm角のプラ棒を貼って縁取り、周りをパテで埋めて整形している。

「朝日」の舷側は「三笠」とかなり異なった印象で、写真を良く見ながらパテ盛ったり、削ったりを繰り返して、独特の丸みの強いタンブルホーム形を再現

している。

船体の基本形が整ってきたらエバグリーン社の1mm×3.2mmのプラ帯材で上甲板の外壁を作り、旧副砲の砲郭などの形を整えていく。舷側の突起物や凹みもそれぞれプラ材やパテ、モーターツールやBMCタガネによる彫り込みで表現した。艦尾のスタンウォークは「三笠」の部品（B13）を形状変更して使用した。甲板面では、旧主砲塔バーベットは「三笠」のパーツ（A3）から切り取って移植した。

最上甲板の形状は各種資料を照らし合わせながらの推測である。接着してしまうと塗装できない部分があるので、先に甲板の塗装を済ませておく。甲板上の突起物はプラ材で作成し、所定の位置に取り付けた。

■艦橋・上部構造物

前部、後部艦橋は各種プラ材を組み合わせてスクラッチビルドで製作しているが、前述のブログ記事に良い写真が公開されており、参考になる。

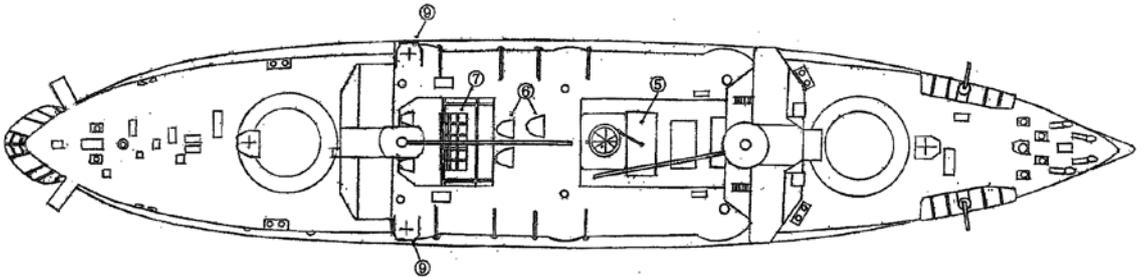
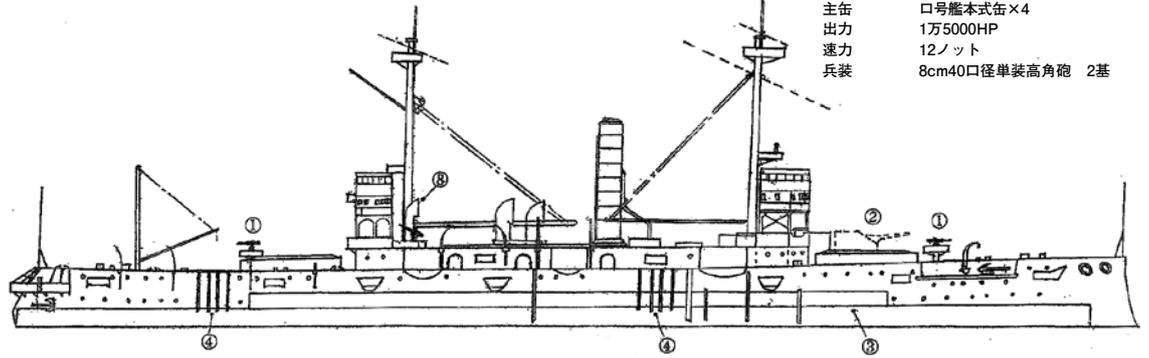
煙突はウェーブのプラパイプ（外形4.5mm肉薄）をベースに、細いプラ材で蒸気管などを取り付けた。煙突周囲の構造物や機装品はよくわからなかったので、単純化した形としている。

前、後檣は1.5mm径のプラ丸棒にやすりがけでテーパーを付けたものを支柱とし、細いプラ材でヤードやトップマストを取り付けた。前檣上部の見張り所は6mm径のプラパイプを輪切りにしたものにプラ板で底を付けて製作。後檣の見張り所は2mm×

朝日 1938年

Asahi 1938

Specification	基準排水量	1万1441トン
垂線間長	122.1メートル	
水線幅	22.9メートル	
機関	3連成レシプロ機関×2	
主缶	口缶艦本式缶×4	
出力	1万5000HP	
速力	12ノット	
兵装	8cm40口径単装高角砲 2基	



1. 40mm単装機関砲
2. 偽砲塔
3. 装甲帯撤去跡
4. 救難装置撤去跡
5. 鍛冶工場 (推定)
6. 缶室通風筒
7. 機械室天窓
8. 機械室通風筒
9. 8cm高角砲

4mmのブラ帯材を切り出して小判型に整え、端面をモーターツールで彫り下げて製作した。デリックアームは0.5mm径のブラ丸棒で取り付けられている。

■武装・その他

前部主砲塔撤去跡に設置された偽砲塔は幅6mm、高さ4mmのブラブロックから削り出して、0.5mm径のブラ丸棒で砲身を付けた。

8cm高角砲は青島文化教材社の、最近のWLシリーズに入っている『更新版 艦装パーツ』から、40mm単装機銃は同社セント級の余剰パーツを流用している。キセル型通風筒は「三笠」のパーツ (C17、C40) を写真を参考に形を整えてから取り付けた。

なお、「朝日」は特務艦になってからも艦首の御紋章は残置されていたので取り付けておこう。

■参考文献

日本帝国海軍全艦船1868 - 1945 (第1巻) 戦艦・巡洋戦艦/並木書房
 丸スペシャルNo.34 特務艦/潮書房
 世界の艦船増刊No.890 日本特務艦船史
 写真 日本海軍全艦艇史 下巻/KKベストセラーズ



▲英国ポーツマス軍港の港外スピットヘッドにおける戦艦「富士」。1897年6月14日、ヴィクトリア女王在位60年を祝う観艦式に参列するため、最終艦装完了前に引き渡された際の姿である。この時の船体は白色に近い明るいグレーで塗られているようだ。彼女は観艦式3日後の17日に最終艦装を完了して日本に向けて出港した



◀1929年2月16日、呉で撮影された潜水艦救難艦時代の「朝日」。この当時、武装は全廃されており、主缶を換装したことで煙突は1本となり、速力は戦艦時代の18ノットから12ノットに低下している。舷側には装甲の撤去による窪みと、巨大な釣瓶式の沈没潜水艦引き上げ装置が張り出しているのが認められる。この時から艦上に簡単な工作設備を備えていた

ISBN978-4-499-23441-2 C0076 ¥3900E

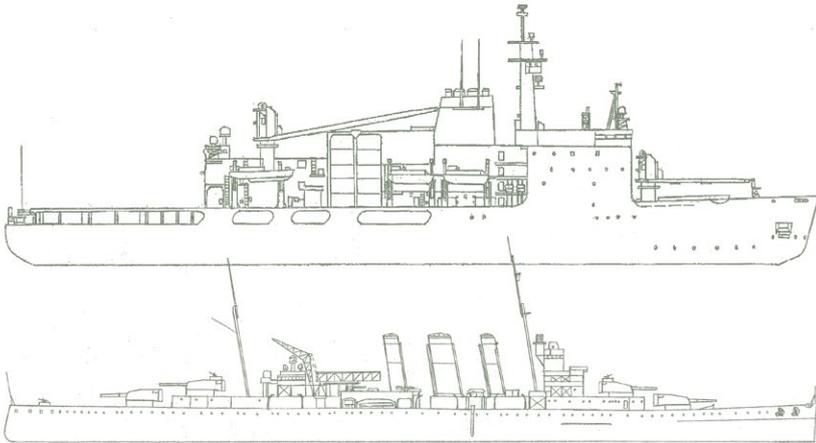


9784499234412

定価(本体3,900円+税)



1920076039003



The World of
Unfamiliar
Ship Models
that no one
Ever Knew
About

シニ艦3

～だれも
見たことない
ジミなマイナー
艦船模型
の世界～

